
異世界召喚された道化師（ピエロ）

葉藻阪 松園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚された道化師^{ピエロ}

【Nコード】

N3276BA

【作者名】

葉藻阪 松園

【あらすじ】

異世界召喚されたごくごく普通の一般人である藤沢章が、子供の頃の夢であるサーカス団を創るために東奔西走しながら異世界を蹂躪する話。ある意味チート（呪い？）を貰った彼が、猫耳娘雑技団や魔法公演や魔獣共の猛獣ショーを創ろうとはた迷惑な方法で努力します。ヤンデレなダークエルフやDMな吸血鬼少女や厨二病を患っている火を吐くライオン達を伴って彼が事件（犯罪？）を引き起こす。【注意】チート要素あり。少しシリアス気味で始まるけど、ご都合主義でハッピーエンド。最初は最弱だけど、だんだんチート

化。ちよつと前に投稿していたもの（異世界召喚された時の対処方
法）と世界観だけ同じです。2012年1月10日にタイトル変更。

プロローグ（前書き）

【注意】少しシリアス気味で始まるように見えるけど、ご都合主義でハッピーエンド。最初は最弱だけど、だんだんチート化。王道な異世界召喚もの。ちょっと前に投稿していたもの（タイトル同じ）と世界観だけ同じです。

プロローグ

カレー、ラーメン、ハンバーガー。俺の好きな食べ物だ。

くだらだら、なんとなく、とりあえず。めんどくさがりな俺が愛用する言葉だ。

要約すると、俺こと藤沢章は、平均的で、平凡で、凡俗で、標準的で、そして、ありきたりな存在だ。

ちなみに友人は俺のことを”藤沢”もしくは、”章”と何の捻りもなくそう呼ぶ。おそらくクラスの大半は、卒業したら俺の名前を忘れるだろう。

そんな俺が小さい頃に憧れたのは、サーカスのピエロだった。そして、最初に諦めた夢もそれだった。

無味無臭で、人畜無害で、存在空気で、脇役キャラと言う言葉がピッタリな俺は、小さい頃ピエロになりたかったことなんてすぐに忘れてしまっていた。

そんな平坦で舗装された道ばかり選んで歩いてきた俺が主役の物語。物語は、俺が10数年ぶりにサーカスを見て興奮していた帰り道で、突然光に包まれた所から始まった。

第一話：初めての奇跡と博愛神の加護

俺を包んでいた光が消失し、視覚が回復して、少しづつ目が慣れ始める。

周りの情報が入って来るに従って混乱していくのが自分でもわかる。目の前にあったはずのアスファルトの道路や車、そして向かいに見えてたコンビニやら全ての物がなくなっていた。コンビニに入ろうとはしゃいでた子供も隣と一緒に信号待ちをしていたバカップルもみんな消えていた。

代わりに、複雑にねじ曲がり、たがいに絡みあっている見たことのない異常に大きな木々がみえるだけだった。

そして、その木の枝同士は擦れ合って、ギャツギャツと悲鳴のような音を奏でているだけだった。

それから、足元に血だらけの女と10mくらい先に黒いローブを羽織った奴が倒れているだけだった。

俺は訳が分からず動揺する。

救急車を呼ぼうと慌てて携帯電話を確認してみるが、なぜかというか、それとも、やはりと言えはいいのか、圏外だった。

足元の女に声をかけようとして、ごくりと言葉を飲み込んだ。

耳が不自然に長く尖っているのが目に入ったためだった。

黒髪で褐色肌で長耳の美人。空想上のダークエルフがいたとしたら、こんな容姿だっただろう。

現実離れたその姿に少し違和感を感じたために、声をかけるのを一瞬躊躇われてしまったのだ。

しかし、不自然な耳への違和感より女の怪我の方が気になって、俺は混乱しながらも話しかけることに成功した。

「大丈夫か？」

自分でもなんて間抜けな質問だろうと思う。

肩から腹にかけて大きく体が裂けて、血まみれだ。

大丈夫なわけではない。

だが、気が動転して他に言葉が出なかったからしかたない。

女性の脇にしゃがんでもう一度声をかけるが、美女の赤眼には生気がない。

彼女の伸ばした手をおもわず掴む。

褐色の肌が激しく波打ち、血が傷口からあふれ出していく。

不規則で荒い彼女の呼吸が、俺の耳に纏わりつくように絡んでくる。

「誰かいないか？怪我を治せる人！！！」

心の中でもう駄目だろうと思いなながらも、必死でその考えを否定して、思わず叫んでしまう。

当然の如く声が周りに木霊するだけで、誰からも返事はない。

あたりを見回すと、彼女の血がそこらじゅうに飛び散っているのに今更ながら気がついた。森独特の湿った臭いに澄んだ空気は、日本の森と変わらない。ただ、血臭が混じっているため、不快感が刺激され、さらに混乱を加速させる。

そのとき、突然声が響いてきた。

『異世界人である藤沢章の召喚を観測しました。』

数奇の女神より奇跡ポイントが藤沢章に250ポイント贈られました
藤沢章の合計奇跡ポイントは、250ポイントになりました』

8

ハッとしてもう一度周囲を見渡すが誰もいない。
すると、再び声がする。

『召喚事故を観測しました。』

嘲笑の邪神より奇跡ポイントが藤沢章に50ポイント贈られました。
藤沢章の合計奇跡ポイントは、300ポイントになりました』

全く状況が掴めないが、どうやら、直接頭の中に響いているようだ
った。

無意味なような気はしたが、俺はとりあえず呼びかけてみる。

「誰かいるのか？いるんだっいたら出てきてくれ！」

耳を澄ますが返事はない。

空耳だったのだろうか。

いや確かに、それもはっきりと、とても明るく、この状況に似つかわしくない澄んだ声が聞こえた。

”嘲笑の邪神”やら”奇跡”やらと、この状況でふざけた単語を並べてくる声はつきり聞こえたのだ。

何もできない自分にも苛立つ。

しかもこの理不尽な状況をどうしたらいいか分からない。

不満をどこかにぶつけたくなくてさらに大声になってしまった。

「隠れてないで早く出てきてくれ！！」

女神だとか、神だとか、くだらないこと言ってる間があったら、怪

我の治せる人のいる所まで彼女を運ぶの手伝ってくれ！

それとも、あんたが治療できるのか！」

するとすぐさま、先ほどと同じ声が頭に響いた。

『藤沢章の願いに博愛神から返答がありました。

彼女の治癒には、奇跡ポイントが5000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは300ポイントであるため、奇跡を起こすことは不可能です。

ただし、藤沢章が”博愛神の加護”の付加を了承するのであれば、奇跡ポイント200ポイントで、彼女の治癒を行なうとのことです』

何を言っているのか未だに訳が分からない。

しかし、治すと言っている。

博愛神の加護の付加を了承すれば、治すと言っている。

奇跡ポイントとやらを払えば、治すと言っている。

そのことだけは理解できた。

長耳女の手が小刻みに震えているのに気付く。

このままだと、長く持たないのには目に見えている。

当然俺の返答は決まっていた。

「女神だか神だか何だかわからないが、治せるなら早く治してくれ
！」

大声で叫ぶ。こんなに大声を出したのは、何年ぶりだろうか。

普段は大声を出さないせいかな咽そうになるのをこらえると、再度、
どこからともなく頭に声が響いてきた。

『藤沢章の願いを受諾しました。』

対価として、藤沢章に博愛神の加護が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを200ポイント支払い
ました。

藤沢章の合計奇跡ポイントは、100ポイントになりました』

そんなアナウンスと同時に、腕の中の褐色女が突然光り出し、まぶしくて思わず目をつぶってしまふ。

目をゆっくりと開けると、だんだん目が慣れてくる。

完全に視覚を取り戻すと、傷が完全に塞がった彼女が静かに寝息を立てているのに気がつき、安堵する。

自分に今何が起こっているのだろうか。

未だに理解できない状況だ。

ただ、長耳女の怪我が治ったのを確認してから、俺の心も落ち着いたのに気がついた。

少なくとも今の状況をとりあえず整理しようと思えるくらいには、冷静に戻れたようだった。

第二話：奇跡ポイントと小さな決意

長耳女の傷が完全に塞がり、目の前で寝息を立てている。

よく見ると、怪我だけではなく、服についてた血も跡形もなくなっており、拳銃の果てに、破けてた服まで直っているようだ。

周りを見渡したが、彼女と倒れている胡散臭い真っ黒のローブの奴以外誰もいないようだ。

しばらく観察すると木の間に駆け抜ける影を見つけたが、どうもウサギモドキらしく、こちらに害意はないようだ。

ウサギモドキというのは、白い羽が生えているので、モドキと表現しただけで、羽ウサギと呼んだ方がいいかもしれない。明らかに地球産ではないことが分かる。

5mくらいの高さにジャンプでき、枝から枝に飛び移ってるのだから。

それから、時たま遠くから悲鳴とも鳴き声とも分からない音が聞こえたときには、心臓が停止するかと思っただが、暫くの間周りをきよるきよる見回した後、明らかに食物連鎖の下層にいる羽ウサギがうるついている間は大丈夫と自分に言い聞かせて、何とか落ち着きを取り戻した。

それにしても俺に何が起きているのか、未だに意味がわからない。そこで、まずは、今の状況を整理することにした。

奇妙な生き物がいることから、異世界であることはほぼ確定だろう。自称神様の言うことを信じるなら、異世界に召喚されたことになる。

召喚事故とってたからには、この長耳の褐色美女はそのせいで怪我をしていた可能性が高い。

そして、奇跡ポイントとやらを払ったから自称神様が彼女の怪我を治してくれたみたいだ。

一番気になるのは、奇跡ポイントとは何なのかということだ。経験値みたいなものなのだろうか。

召喚事故されたという訳のわからない理由で数奇の女神と嘲笑の邪神とやらが勝手にくれて、怪我の治すのに博愛神とやらに無理やり払わせられた感じだが…。

博愛なら対価とらずに勝手に勝手に直せよと思うのは、俺だけではないはずだ。

その時ついでに”博愛神の加護”とやらも俺にプレゼントしてくれたようではあるが…。

しかしその”博愛神の加護”というのも意味分らない。何かいいことあるのだろうか。

まあ、誰かに聞けばそのうち分かるだろう。

この美人な長耳お姉さんが教えてくれると嬉しいんだが…。

調べなくてはならないことで山積みだ。

さて、これからどうしようか？

『藤沢章の願いに知識神から返答がありました。』

この世界の全ての理を知るためには、奇跡ポイントが5000兆ポイント必要です。

ただし、概要だけであるなら、奇跡ポイント5ポイントでお教えするとのことです。』

また、脳内神様が声をかけてきた。

こちらのことを逐一見張っているのだろうか。

とりあえず、5ポイント払うことにしてこの世界のことを聞くことにする。

分かったことは、次の三つだけだった。

1・ここは、トルマニアン帝国の幻影の森。

2・奇跡ポイントは、神様が気にいることをするともらえるらしい。しかもいろんな神様がいる。

3・奇跡ポイントを消費すると、奇跡が起こせるらしい。怪我を治したり、スキルを覚えたり。ちなみに、魔法もスキルに入る。その奇跡に奇跡ポイントがいくらかかるのかを聞くだけならタダみたいだ。

1はこの際置いておこう。

とりあえず、突っ込みたいのは、2だ。

異世界召喚が気に入って”数奇の女神”が奇跡ポイントをくれたのはいいとして、召喚事故観測したからってポイントくれた”嘲笑の邪神”は一体何がしたいのか？

悪趣味としか言いようがない。本当に神様なのか？

ただ、3に関しては心躍るモノがある。そう、奇跡ポイントでスキルを覚えられる。

いろいろ質問したところ、全ての魔法を使えるのに500億ポイント、全ての火魔法なら50億ポイント、マッチ程度の火を起こす魔法は50ポイントのようだ。残り95ポイントしかないのに興奮してスキルを貰ってしまう所だった。

魔法以外のスキルに関しては、魔獣使いに必要な全ての能力が50億ポイント、目の前ではねて飛んで行ったあの羽ウサギ一匹に限定した魔獣使いの能力だと50ポイントで取得可能とのことだった。ちなみに、ピエロに憧れていたので、ボール乗りを聞いてみたら50ポイントだった。

今は奇跡ポイントは95ポイントしかないのですが、どうしようかしばらく悩み、とりあえず、長耳な美女が起きた後に彼女の話聞いてから、もう一度考えようと結論付けた。

この時に、一つの決意が、人生で初めて俺の心の中に芽生えたことを、俺は後々気がつくことになった。

この世界で、サーカス団を結成してみようという決意が生まれいたことを。

異世界に召喚されたことで気分が高揚していただけかもしれない。魔法が使えることにテンションが上がっていただけなのかもしれない。

しかし、この世界では、ほんの少し挑戦をしてみようと、自分でも意外だと思うようになっていた。

ほんの少しだけの、ほんの一欠けらの決意だったが、確かにこの時芽生えたようだった。

第三話：漆黒の美女と言語神の加護（改）

「うう」

長耳な褐色お姉さんから呻きが聞こえてくる。

目鼻立ちの整ったいわゆる典型的な褐色美女には、似つかわしくな
いかわいい呻きだ。

少し心がいやされて、心が落ち着いてくるのか自分でもわかる。

これからは”長耳さん”と、さん付で呼ぶことにする。

褐色の肌に漆黒の長髪。スツとした鼻に、そして、先ほど見つめて
きた？時に見えたくりつとした緋色の目。

その中でも、黒髪は特別目を引く。あまりにも黒いのだ。今まで日
本人は黒髪だと思っていたが、彼女の髪を見てしまうと黒髪とは言
えなかったのだと思えてしまう。彼女の髪に近づくとまるで全ての
ものが吸い込まれていくブラックホールなのではないかと錯覚して
しまうくらいに、鮮やかな黒なのだ。

その髪の中からぴんと突き出した特徴的な尖った耳に思わず触って
みそうになるのを何とかこらえる。

服装に目をやると、どうやら上下とも革製のようだ。いわゆるバイ
ク用のレザージャケットとレザーパンツに一番近い気がするが、ジ
ヤケットは半袖だったりジッパーではなくボタン式だったりとデザ
インは少し違和感がある。

スタイルは、日本人離れた滅茶苦茶いい体で、レザージャケット

の胸部がはちきれそうになっている。

まあ、日本人どころか地球人ですらないだろうが…。

それにしても、はち切れそうな部位は、すいかとは言わないが、メロンくらいはあるようだ。

そんな邪なことを考えていたためか、いつの間にか俺の手が彼女の胸を揉んでいることに気がついた。

一瞬自分が何をしているのか理解ができなかった。

気がついたら彼女の胸に手が伸びていたのだ。

全く意味が分からない。

いくらむつつりとはいえ、寝ている女の胸を揉むとかなり得なかった。

そんな度胸のある奴ではないことが自分が一番良く知っている。

どうしてしまったのかと混乱しているためか、すぐに手を離すという判断に遅れが生じる。

異世界召喚で体に変化が生じたのかと答えの出ない思考を巡らせていると、ピクリと長耳さんが反応したのに気がついた。

どうやら彼女が目覚めたようだ。

俺の手が彼女の胸を揉んでいることを確認した瞬間、人も殺せそうな鋭い殺気を向けてくる。

長耳さんが引きつった笑いを見せながら、俺の頭に手を伸ばしてくる。

細くて綺麗な手だなと全く関係ないことを考えながら現実逃避しているうちに、彼女の手が俺の顔面を鷲掴みにする。どうやらアイアンクローというプロレス技で俺に制裁を加えるようにしたようだ。最初は人ごとのように考えていたのだが、痛みで思考を遮られる。

長身の美女が立ち上がりながら、アイアンクロー状態で俺を無理やり持ち上げる。

「s d o i u o u a f a j j j a o j f a o j f a j o a
i j o d i j f a o i j f a o j o a j o f j o a j o a f
j f o j a s d f k f c z p v f j a d e i f j e i a o f j
a o j」

美女がアイアンクローしながら喋ってくるのだが、何言ってるのか全くわからない。

分かったのは、アイアンクローの力が半端じゃないことだけだ。

女の細腕なのだが、滅茶苦茶力が強い。

こんなことで再確認しなくなかったが、ここはやはり異世界のようだ。

俺は足が浮いた不安定な状態で謝っているのだが、全く言葉が通じない。

俺は、命の恩人のはずなのだが…。

まあ、眼が覚めたときに胸揉んでる男がいたら、普通は犯罪者だと思っただろう。

少なくとも命の恩人とは思わない。

牢屋ではなくあの世に直行させられそうな勢いだ。

痴漢行為セクハラで返りうちされた場合は、天国に果たして行けるのだろうか。

まあ、”嘲笑の邪神”という訳分からん存在がいるんだから、”痴漢の邪神”とかも居てもおかしくはない。

天国行きは大丈夫だろう。

邪神が天国にいるか分からないし、そもそも脳内神様かもしれないが…。

とりあえず俺の頭がい骨が限界だ。

さっきの脳内神様に喋れるようにしてもらえないのか。
あの怪我治せるんだったら、大丈夫だよな？
大丈夫のはず…。

そんなことを考えているとすぐに返事があった。

『藤沢章の願いに言語神から返答がありました。

公用語ドーマ語スキルの付与には、奇跡ポイントが1000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは95ポイントであるため、奇跡を起こすことは不可能です。

藤沢章が”言語神の加護”の付加を了承するのであれば、奇跡ポイント50ポイントで公用語ドーマ語スキルを付与してくれるようです』

「ああ！ああ！何でもいいからそれで！

早く謝らないと、俺の頭が持たない！！！」

『藤沢章の願いを受諾しました。

藤沢章に公用語ドーマ語スキルが付与されました。

対価として、藤沢章に”言語神の加護”が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを50ポイントを支払いました。

藤沢章の合計奇跡ポイントは、45ポイントになりました』

「もう二度とおいたができないように私が手術してやるよ。

方法はとりあえず二つあるから、ウジ虫のお前に特別に選ばせてやる。

てめえの腐った右手をゆっくりじっくり膿血虫に食われる方法と、その腐った脳みそを頭搔っ捌いて、聖水で消毒する方法だよ。好きな方選びな！」

最初に理解した異世界言語は死刑宣告だった。

言葉が分かれば、人間だれしも分かりあえるよな？
彼女が人間かどうかはまだ分からないが…。

第四話：不気味な美人と不気味な微笑（改）（前書き）

2012年1月10日に改定しました。

第四話：不気味な美人と不気味な微笑（改）

とりあえず彼女の誤解をつくことに成功したようだ。ただ未だに警戒してか少し離れて喋っている。胸を揉んでいたのは誤解でもなんでも買いかから仕方がないが。

美人のお姉さんとマンツーマンでお話できる日が来るとは思いもしなかった。

まあ、お姉さんというより姉御って感じなんだけどな。

しかもヤンデレ。デレてはいないが、病んではいる。

何が言いたいかと言うと、彼女は本当に口が悪い。

最初は怒りで言葉が汚くなってるのだと思ったが、どうやら素で口が悪いようだ。

この世界の人にとっては当たり前なのかもしれないが、さっきから俺の繊細な心臓が悲鳴をあげている。

しかも、時折見せる笑い顔が本当に気味が悪い。

美人がにやけながら毒を吐いてるせいなのか、俺の心の中で拒否反応が起こっている。

最初に笑顔見た時、背筋が凍った。凍ったという表現が正しいかどうか分からないが、普段意識していない背中の感覚器官の感度が異様に上昇して、冷たいという情報を脳に発信しまくっていた。

それでも浮世離れた美貌のせいで嫌うことはできないのだが。

美人でなければ、いくら痴漢した負い目があるとはいえ今頃俺は切れていただろう。

彼女の名前は、加奈さんというようだ。

本名は、加奈・ヴァレンダン・夏目で、年はおそらく俺より少し上で24歳くらいだと思われる。さすがに初対面の女性に年を聞くことはできない。

なんか日本人のハーフみたいだな…と思っていると、父親は大和国という明らかに日本に関連した名前の国の出身らしい。ちなみに母親は闇の妖精族ダイクエルフのこと。

やはりと言えいいのか、異世界らしくダイクエルフで合っていたようだ。

そんなわけで、今はそんなことよりハスキーボイスでヤンデレ？な姉御と重要なお話し中だ。

「で、ウジ…、くそ虫は異世界から来たと…」

なぜ言い直すのか分からないが少し評価を上げてくれたのだろうか
と勝手に好いように解釈して肯定する。

「おそろく」

「くくつ、顔は平平凡凡、体も風折草より貧弱で、何の取り柄もな
いくそ野郎なりに、境遇だけは変わってるね」

痴漢した俺が悪いからこのくらい言われるのは仕方がないと、とりあえず自分に言い聞かせて、平静を装ってスルーすることにし、話を続ける。

「なんで俺ここにいるか分かる？」

「おそらく、その胸の小さいお嬢ちゃんが召喚したんだろ」

「お嬢ちゃん？」

「あそこに転がっているアバズレだよ」

余りにも怪しかったので放置していたローブが少女だと知り、慌ててローブに近づくと、

地面と見分けな着かない黒色のごつごつしたローブに近づくと、柑橘系の香水か何かの匂いがする。

どうやら本当に女性であるようだった。

俺は初めての異世界召喚体験中で気が動転していたので、すっかり忘れていたのは不幸な事故で仕方がないということで、うつぶせの少女には許してもらうことにする。

黒いローブ羽織っているから女の子かどうかはまだ確定してはいな

いが…。

いつまでも地べたに口づけはかわいいそうなので、ひっくり返してあげることにした。

ローブを持ってひっくり返すと、どうやら、スレンダーな少女であることが分かる。

スレンダーというのは、軽いことから判断した。決して、胸を触ったわけではない。

異世界人だからといって、体重が重い訳ではないようだ。力は遥かに強かったが。

未だにこめかみがジンジンする。

アイアンクローから解放されてだいぶ経つのだが…。

顔が見えたことから、ローブの女は17歳くらいの少女であることも分かった。

透き通る白い肌。ローブから覗く真っ赤な髪。細身でそこそ長身の少女だ。それから、ピンクのかわいい小さな唇に小さなつんとした鼻。おそらく相当もてるだろう。

異世界のかわいい基準は分からないが、地球では100人いたら99人はかわいいと言うはずだ。

100人といわず99人にしたのは、知り合いに1人かなり偏った趣向の友人がいたからで、特に深い意味はない。

ローブを羽織ってるので、尻尾はあっても分からないが、加奈さん

みたいな長耳ではないようだ。

残念ながら、少なくとも猫耳はなかった。

フード被っていたのになぜ分かるのかと質問がありそうだが、頭のフードを一旦取って確認したのだ。

エルフがいたんだから、猫耳娘がいるかもと少しだけ夢見てしまったのは、仕方がないだろう。

フード取って得られた情報は、やはり美少女だと言うことくらいだ。異世界で会った二人が二人とも美人って異世界に来てよかった。

それとも自称神様が主人公補正でもくれたのだろうか。

あと、メチャクチャでかいサングラスをかけたメチャクチャ怪しい少女であることも分かった。

なんで、こんな大きいのをつけてるのだろうか。

流行ってるのか。

それとも有名人だったりするのか。

異世界センスは理解できない。

そんなことを考えていると、自分の手が少女の胸に置かれているのに気がついた。

まただ。

また、いつの間にか揉んでいた。

何をとほ言わないが、加奈さんより少し自己主張の足りないふくらみを揉んでいた。

俺はいつたいたいどうしたんだらうか？

「これは傑作だね。くそ虫は、もしかして”博愛神の加護”持ちかい？」

混乱している俺に蔑んだ目を向けながら加奈さんが質問してくる。

加奈さんが知ってるってことは、奇跡ポイントというのは、誰でも利用できるシステムのようだ。どうやら脳内神様でも自称神様でもないらしい。

「えっ、知ってるの？」

加奈さんの治療の対価に”博愛神の加護”を付加させるって、突然頭に声が響いてきて…。

”博愛神の加護”って何なの？

「くそ虫が直してくれたのかい。どうやら唯の糞虫じゃあないみたいだね。礼を言うよ。」

くくくっ…、そうか。くそ虫が…、くくくっ…、くくくっ…、あは

「そういや、くそ虫の”博愛神の加護”のことだけど…」

明らかに笑いを堪えようとしている加奈さんが言葉を続ける。

「おそらくいつの間にかセクハラしてしまう加護だよ…」

加奈さんは、にやけながらこちらの反応を伺っているようだ。
俺は彼女が発した言葉に理解が追いつかず、少し固まってしまっていた。

第五話：“加護”と彼女がヤンデレな理由（前書き）

すいません。

本日（2012年1月10日）に第3話の最後と第4話のほとんどを改訂しました。

キャラが薄すぎると言われて、それもそうだなと、加奈のキャラをヤンデレ？に変更しました。

改定版（特に第4話）を読んでいないとこの話から意味が分からなくなると思われます。

ご迷惑をおかけします。

それからお気に入り登録してくれた方ありがとうございます。
では。

第五話：”加護”と彼女がヤンデレな理由

「加奈さん。もう一度言ってくれないか？」

異世界召喚のせいで、耳が悪くなってるみたいだ…」

セクハラに加護という幻聴が聞こえてしまったようだ。

異世界召喚って怖いな。

「いつの間にかセクハラしてしまう加護だよ。」

加護が発動する条件や効果は、個々で違うみたいだから、細かいこと知りたけりゃあ、くそ虫が知りたいって願えば答えてくれるよ」

聞き間違えではなかったようだ。

深呼吸して、加奈さんのアドバイス通りに自称神様に尋ねると、心の中で質問するとすぐに答えが返って来る。

『藤沢章の質問に博愛神から返答がありました。』

藤沢章に付加されている”博愛神の加護”とは、女性をかわいい又は綺麗だと思ったときに、女性特有の部位をいつの間にか撫で回してしまう加護です。

なお、相手への魅了の効果は、一切含まれておりませんので気をつけるようにとのことです。』

無情なアナウンスが頭に響いてきた。

かわいいと思っただ瞬間に撫で回してるとか。

どうやら俺は町を歩くことすらできないようだ。

一体どの辺が加護なのか神様に問い詰めたくなる。

そういえば、言語神の加護も貰ってたよな。

そっちは大丈夫だろうか？

言語神ということは、誰とでも話せるようになる加護だろうか。

そうすれば、魔獣とも話せるし、もしかしたら簡単に魔獣使いになれるかもしれない。

そしたら、俺でもこの世界でサーカスが開ける。

「しかも、言語神ってことだから、喋ったことが現実になる言霊の効果もあるに違いない」

『藤沢章の質問に言語神から返答がありました。藤沢章に付加されている”言語神との加護”は、考えていることを思わず喋ってしまう加護とのことです。妄想している場合に高確率で、口から洩れてしまいます。しかも、妄想が増大されるという特典付きとなっているようです。また、妄想が実現することは一切ないので気をつけるようにとのことです』

どうやらこちらの神様は、マメに返答してくれるらしい。余り聞きたくない答えだったが…。

もう一つも役にたたないどころか、害にしかならない加護のようだ。特に妄想増大がいらぬ。

加奈さんもいつの間にか憐れみの表情になつてる。

”どうやら”言語神との加護”についても何か知っているみたいだ。まあ、さっき思いつきり妄想口走ってしまったし、こんな訳の分からない加護が存在していたらみんな知ってるだろうしな。

よくよく考えれば、対価として付加されたんだから、役に立つ加護なわけない。

数分前の浮かれてた俺を殴ってやりたい。

それにしても、神様は、なんでこんな意味の分からない加護を創ったのだろうか。

理由分かったところで俺には関係ないだろうが…。

そういえば、人によって効果が違っつてことは、もしかして…。

「加奈さんも言語神の加護を？」

一瞬驚いた表情を見せた加奈さんだが、また、背筋の凍る笑みを浮かべた後返答してくる。

「ウジ虫のくせに、いっばしの思考はできるみたいだね…。

そっだよ。私も”言語神の加護”持ちさ。

ただし、私の加護は、人を不快にさせる言葉を発してしまうっつものだけだね。

加護で私の笑った顔も不快に感じるようになってるみたいだし、その上、沈黙していると強制的に不快な笑顔になってしまう特別仕様を、偉大で気がきく神様はつけてくれたようだよ」

どうやら、加奈さんの口が悪さと不気味な微笑みは加護のせいらしい。

加奈さんもかなり苦労していそっだ。

かなり笑顔が引きつっている。引きつっているのは加護のせいかもしれないが、今の俺には判別できない。

とりあえず、俺の異世界人生はマイナスからのスタートになりそっだということだけは理解した。

第五話：”加護”と彼女がヤンデレな理由（後書き）

途中での変更で”迷惑おかけしました。

第六話：召喚事故と赤髪少女

「いつまでイジケルてるつもりだい？」

軟弱なのは、体だけじゃなく心もなのかい？」

しばらくして、悪いと思ったのか、いつの間にかにやけ顔ではなくなった加奈さんが声をかけてくれた。

いじけた俺の精神が回復するのをしばらく待っていてくれたようだ。さすが姉御だ。

ただし、彼女の言葉でさらに心に傷を負ってしまったが。

「ああ…。」

そういえば、なんで怪我を？」

とりあえず、話題を変えようと思って切りかえす。

これ以上精神に負担をかけたなら鬱になりそうだ。

召喚の失敗で怪我してたのだろうと予測をしてはいるが、もし敵がいるのだとしたら危険であると判断し、一応加奈さんに尋ねることにした。

「そのクソガキが私に向かって召喚をかけたきたんだよ。」

普通、召喚するのは、何もない空間に向かってするんだけどね…。」

まあ、時空のひずみか何かで体が裂けてしまったんだろうね。」

ここにきて新たな事実判明する。

どうやら赤髪美少女が加奈さんのいる場所へ故意に俺を召喚したせいで、怪我をしていたようだ。
召喚の失敗ではなかったらしい。

それにしても加奈さんは、殺されかけてたのにノリが軽い。
異世界では常識なのだろうか？

「召喚って危険なのか？」

「おやおや、やっぱり頭にウジがわいているのかい？
普通はそんな使い方するわけないだろ。

召喚には奇跡ポイントもかかるし、特に異世界からの召喚なんてかなり対価を払わされるだろうから。

普通の攻撃魔法なら、一度覚えれば奇跡ポイントもいらないし、対価の要求もないし、そっちの方が遥かに効率がいい。

脳みそ持ってるいや誰でもわかることだろう？」

加護のせいだと分かっているても、美人に悪口を言われると少しへこむ。

深く考えずに話を続けることにする。

「どっつして召喚を？」

「私を知るわけないよ。会ったのも初めてだし、こっちが聞きたいくらいだ」

どうやら加奈さんと赤髪少女は知り合いではないらしい。

それにしても見知らぬ他人が突然攻撃してくるとは、ここは危険な世界だと改めて認識する。

「そういえばこれから行く所もないなら、私の家に来な？」

それとも、この森で野たれ死にたいかい？

ウジ虫がいくら野たれ死のうがどうでもいいけど、臭い死体を私の活動範囲で晒されると不愉快だからね。

特別にウジ虫を飼ってやるよ。

それに、ここがどんな世界か知つといた方がいいだろう？」

異世界で最初に出会った人が加奈さんみたいないい人であることにほんの少しだけこの世界の神様に感謝する。

加奈さんはいつの間にかセクハラも許してくれたようだ。

口は悪いけど。

「いいのか？」

「ああ。もちろん。それじゃあ、その雌豚を私の家まで運ぶの手伝いな！」

加奈さんは赤髪少女を指さしながら、家まで運ぶのを頼んできたので、危険はないのかと疑問に思っって質問をする。

「殺されかけたのに、大丈夫か？」

「ああ、餓鬼は餓鬼で使い道があるからね……」

加奈さんの赤眼が舐めまわすように、赤髪少女の肢体に視線を這わす。

何をさせるつもりなのだろうか…。

俺は、ついてく人間を連れてるのかもしれないようだ。

第七話：魔法と奇跡と少しデレ？

俺は、赤髪少女を担いで加奈について行く。

加奈と呼び捨てにしているのは、一緒に来るのならそう呼んでくれと頼まれたからだ。年齢も近そうだし、他人行儀は嫌らしい。ちなみに加奈の呼び方もウジ虫からあんたに格上げされたようだ。どうも相手に対する猜疑心の大きさで呼び方が勝手に変化するらしい。初対面の男は大抵ウジ虫になるようで、俺だけが特別だったわけではない。そんな特別はいらさないが。なにはともあれ、何とも微妙な加護であることを再確認させられた。

しばらくは突然飛びだしてくる当たっても全然痛くのない角の生えた蛙をよけつつ、巨大な木々の間を通って森を抜けた後に、背丈より高く意外にもろい乾割草というらしい植物をなぎ倒しながら草原を進んでいく。

草原を一時間歩いたくらいで再び森林に入り、少女を担ぐのにも、物珍しいこの世界の風景にも慣れてきたので、この世界のことについて加奈に質問することにする。

それは魔法についてのことだ。

通貨やら風習やらと他にも加奈に聞かなければならないことはたくさんあるが、どうしても最初に聞いておきたかったのだ。折角の異世界だ。これを聞かねば始まらない。

単純に使ってみたいと言うのもあるが、マジックショーを開いてみたい。サーカスで。

それにサーカスがすぐに開けず他の職に着いたとしても、おそらく必要になって来るだろう。

加奈を見て分かったことではあるが、どう考えても体力的には俺はこの世界の人と比べて劣っている。

格闘技の経験もないので、何か不測の事態があつた時に少し不安が残る。

そういつたことに対処するには、魔法しかないだろう。

そういう結論に至り、加奈に聞くことにする。

「魔法とスキルは何が違うのか？」

「うん？魔法？」

まあ、暇だから特別に教えてやるよ。ただし、一度しか言わないから、その貧相な脳みそに気合で詰め込みなよ。

魔法つてのは、スキルの一種だからね。

光、闇、火、水、土、風の精霊神様を6大精霊神つて呼ぶんだけど、6大精霊神に関するスキルを魔法つて呼ぶだけだよ。

だから、スキルと同じように奇跡ポイントで覚えられる。いくら異世界人とはいえ、そんならい持つてるだろう？

精霊や妖精族は、もともと使えるけどね。

あんたの場合は、使いたい魔法を願えば、魔法を取得できるよ。それで、一度取得した魔法は、制限がなければいくらでも使えるようになる。
分ったかい？」

「じゃあ誰でも魔法を？」

「誰でもってわけじゃない。魔法の取得ポイントは高いし、普通の人は、裁縫スキルとか料理スキルとかにポイントを使ってる。私みたいだね」

加奈が普通と聞いて少し戸惑う。異世界の人は超人だらけなのだろうか。

疑問が顔に出たのか加奈が話を続ける。

「まあ、私の場合長いこと山の中で一人で生活してたから、多少身体強化にもポイント使ったよ」

どうやら、それで力が強いようだ。
ということは、俺も身体能力無双できるのだろうか？

「どのくらいポイント使ったら俺は加奈くらい強くなれると思う？」

しばらく考えてから加奈から返答がある。

「うーん。あんたには無理だろうね。」

私は闇の妖精族だから元々身体能力高いし、身体能力の強化にかか

るポイントも少なくて済むからね。

平凡な通常人には無理だと思つよ。あんたは異世界人だけど、通常人と体力的にも変わりなさそうだし…。いや、それどころか、あんたはネズミ族のくしゃみでも吹き飛びそうなくらい貧弱だし、何の取り柄もない通常人より軟弱に見えるね」

だんだん加奈の口の悪さに対するスルースキルが身についてきたようで、重要な所だけ聞きとれるようになってきたような気がする。とりあえず、気になったのは、ポイントが少ないとはどういう意味なのかという点だ。

人によつて違つてことなのだろうか。

「ポイントが少ないってというのは？」

「例えば、私は闇の妖精族だから、戦乱の神や闇の精霊神には気に入られていて、それに関係するスキルの取得にかかるポイントは少ない。

けど、くそ忌々しい光の精霊神には嫌われているせいか光の魔法に関係する魔法の取得は難しい。

取得するためのポイントが高すぎてね。

何の特徴もない通常人の場合は、どれも平均的な覚えやすさだけだね。

異世界人は分からないけれどね…」

なるほど、種族によつて覚えやすいスキルとそうでないスキルがある。

ポイント少なくて、強力なのがいいな…。

異世界人は何か得意な物はあるのだろうか。

「なんだい？もしかして、冒険者になるつもりかい？
やめといた方がいいよ。」

毎日知り合いが一人は死んでいく危険な職業だ。

猫より貧弱なあんたにその才能があるとは思えないね」

「そういう訳ではないが、いつまでも加奈の世話になるわけにはい
かないからな…。」

それに普通の職業でも一つぐらい攻撃スキル持ってないと、この世
界は危なそうだ」

見知らぬ他人がいきなり攻撃してくるくらいだからな。

「そうかい…。」

でも魔獣を倒せるくらいの攻撃スキルつてのはすぐに覚えられるわ
けじゃない。

一人前の冒険者の使う攻撃スキルは約100ポイント、そこそこの有
名な冒険者は200ポイントくらいスキルにつき込んでるらしいね

…。

…。

悪かったね…。」

あんたに下劣で下種な下心があったとはいえ、私を治すのに200
ポイントも使わせてしまっ…。」

加奈はポイント使ったのをずいぶんと気にしているようで、申し訳
ななさそうにこつちを見てくる。

相変わらず口は悪いが…。」

200ポイントは、結構なポイントだったようだ。

ここまで親切？にしてくれるのは、そのためだろうか？

まあ、必要経費と思って200ポイントくらい諦めよう。

異世界情報を一日目でかなりゲットできたし、口は悪いが美人と知り合えたしな。

ポイントなんて、また貯めればいい。

とりあえずどのくらい時間がかかるのか聞いておくべきだと考え質問する。

「奇跡ポイントって貯めるのに、どのくらいかかる？」

「一流になる冒険者は、1年かけて10ポイント貯めると聞くね。もちろん、どのくらい神様に気に入られることをしたのかで、年数は変わるけどね」

一年で10ポイント？

そんなにかかるものなのだろうか？

そこそこの有名な冒険者のスキルが200ポイントだから、20年…。いや、52ポイントあるから、後15年くらいか…。

普通にやっていたら、今すぐ、俺無双は難しそうだ。

何とか裏技はないのだろうか？

というか、その間、冒険者の奴ら何してるんだ？

「スキルが手に入るまで、冒険者は何を？」

「そりゃあ、冒険者だね。」

最初に、簡単に発展性のあるスキルを考えて、それを10年かけて強化していくんだよ。

そうすれば、ずっと冒険者をやれるし、スキルポイントも無駄にならないからね」

なるほど…。

冒険者は脳筋だと思っていたが、いろいろ考えているようだ。

「速く覚える方法はある？」

「は〜。」

その足りない頭でちょっとは自分で考えな！

私が海より広い心を持っていてよかったね。

今回は教えてやるから、耳かっぽじってよく聞いときな」

よく加奈を観察しているとだんだんわかってきたが、口は悪いが顔が申し訳なさそうに少し引きつっているようだ。

まあ、好きで悪口言ってる訳ではないから当然かもしれないが…とそんなことを考えながら、加奈の話の続きを聞くことにする。

「スキルに多くの制限をかける方法があるよ。

一年に一回しか使えないとか、10分間詠唱時間がかかるとか…。そういった制限をかければ、比較的小さなポイントでそこそこの強力なスキルを最初から覚えられるからね。

冒険者の場合は、そういう制限を最初にかけておいて、ポイントがたまったらポイントを使ってどんどんその条件を無くしていくって方法をとるんだよ。

どちらの方法が速く使いものになるかは、スキル次第だろうけどね」

一年一回か…。

まあ、命がかかった時の必殺技みたいな感じか…。

10年後か20年後には、制限を取っ払えて何回でも使えるようになるわけか…。

「他に裏技見たいのあったりとかは？」

「裏技かい？」

姑息なあんたらしい思考だね。

誰でも知ってることだが、神様に気に入られるって意味では、加護持ちになるって手もあるね。

あんたの場合、”博愛神の加護”と”言語神の加護”を持っているから、博愛神と言語神に係るスキルはかなり取得しやすいはずだよ」

なるほど。いいことを聞いた。
加護持ちだとそれ系の能力の取得ポイントが少なくて済むのか。

だが、博愛神と言語神は攻撃スキルがあるのだろうか。

「加奈は、博愛神と言語神の攻撃スキル知ってる？」

「直接攻撃スキルは、余り聞いたことないね。」

博愛神の加護持ちで有名なのは、昔いた伝説の神父兼冒険者のガレニア・レバンドフスキーの拳闘友愛っていうスキルが有名だけどね。何でも半径100メートル以内に存在する武器がすべて破壊されて、攻撃スキルもすべて無効化されるとんでもないスキルだったらしいよ。

殴りあいでも分かり合おうとした腐った思考の変態神父だったらしいね。

まあ、その変態神父はライオン族の獣人だったから何とかなるスキルだけど、病人より貧弱なあんたが使っても殴り倒されて終わりだろうけどね」

博愛神使えないな。

そいつが一番有名ってことは、他の奴らはそれ以下のスキルってことか？

まあ、博愛神なんだから攻撃スキルあつたら困るよな。

「有名な人、他にいる？」

「他にかい？うん。」

確か50年くらい前に、言語神の加護持ちで確かアマラカス闘技場で序列3位までいった男が居たらしいね…。

まあ、余りにも下らない奴に思えたから、名前は忘れたけどね…」

闘技場で序列三位。

それは期待できるかもしれないな。

「どんなスキルだったんだ？」

「人格口撃と精神的^{トリスツマ}外傷口撃だったかな？」

詳しくは分からないけど、一対一では無敵だったらしいよ。

ただ、一度に一人にしか使えない制限があるらしく喧嘩は弱かったようだね。

闘技場では最強だったらしいが、そいつが一位になる前に観客から反対運動が起こって首になったけどね。

よほど卑怯な奴だったんだろね。」

な、なるほどな…。

すごく微妙だ。

まあ、口撃っていうくらいだから、悪口言うだけの能力なんだろう。トラウマえぐるような。

格闘技見に来て、マイクパフォーマンスで決着が着いたらそら観客怒るよな。

というか、そいつ何のために闘技場行ったんだ。

「そうそう、6大精霊神の加護の付加はやめておきなよ。」

6大精霊神の加護は、全て10年以内に死んでしまうからね。

例えば、火の精霊神の加護は、加護持ちになってからちょうど10年後に体が燃え尽きるっていう灼熱効果があるからね。

代わりに、少ない奇跡ポイントで強大な火の魔法を覚えられるらしいがね。

まあ、あんたが一匹燃え尽きるのはこの世界のためになるだろうか、無理に止めはしないけどね」

燃え尽きる…。

そこまでして、俺無双はしたくないな。

聞いておいてよかった。

知らなかったら、”火の精霊神の加護”なんて、もろ主人公が持つような名前前の加護だから無条件でOKしてたな。

もしかすると、俺のセクハラの加護と妄想の加護はましな方だったのかもしれない。

「加護ってなんでそんなにマイナスなモノばかりなんだ？」

「さてね。神様の考えることは分からないが、人間がマイナスな加護をあえて欲しがるってことは、それだけその神様を信仰してるっ

て証になるからじゃないのかい。
死をかけてでも欲しがるものは、特にね」

『いじわるしても信じてくれる人は、私を愛してくれてるってこと
ね』ってことか??

納得できるような。できないような。

なんか人間臭い神様だな…。

加奈がふと俺が背負っている赤髪少女に目を移す。

「その胸の小さいお嬢ちゃんはおそらく”火の精霊神の加護”持ち
だろうね」

「この子が？」

「ああ。髪が真っ赤だからね？
火の妖精族エルフならともかく、平凡な通常人でそこまで髪が赤いのなら
間違いないね」

マジでか…。

この子可愛い顔して、とんでもないものに手を出してるな…。

加奈と同じでヤンデレ化しそうだ。

俺のハーレム要員候補なのに大丈夫か？（【注意】完全な妄想です）

ふと、俺の耳に少女の息がかかっていることに気づく。

かわいいな…と、そう思ってしまった。

少女に背中に背負いながらも、できるだけ彼女のことは考えないようにしていたのだが、少女の話を振られたせいでそちらに意識が向かってしまった。

気がついた時には、ロープの上から赤髪少女の太もも当たりを持っていた俺の手が、いつの間にか、彼女のお尻の方へ移動していた。柔らかいお尻へと。

背中に背負っているので赤髪少女は見えないから大丈夫だと思っただが。

どうやら”博愛神の加護”は対象が見えてなくても、かわいい思っただけでも発動するみたいだ。

それと、撫でまわしてしまう”女性特有の部位”っていうのは、胸だけでなくお尻も含まれるというのが分かったことも今回の失敗の収穫だ。

最初から、きちんと説明してほしい。

失敗したと思いながら、『マシユマロ並みに柔らかいな』と妄想漏洩した瞬間に、顎に加奈のアップパーをくらった。

パンチが消えるとういうのを初めて見た。見たというのは少し語弊があるが。おそらく加奈の位置的にアップパーだろうと予測したのであって、実際には顎に衝撃があったのに気付けたただけだ。加奈は力が強いだけじゃないみたいだ。

『藤沢章の痴漢行為への懲罰による失神を観測しました。

嘲笑の邪神より祝福ポイントが1ポイント藤沢章に付与されました。

藤沢章の合計祝福ポイントは、46ポイントになりました』

意識が飛ぶ瞬間、そんなアナウンスが聞こえた気がした。

第八話・世界の理と猫耳娘（前書き）

最初に謝っておきます。

前回、気絶したのは、最初の一行を書きたかったからです。

第八話：世界の理と猫耳娘

「知らない天井だ」

これ一度言ってみたかったんだ。

何しろ異世界召喚された主人公（希望）だから。

例えベットではなく床に転がされていたとしても。

それにしてもさすが加奈。

俺が部屋にいると言うことは、彼女は人を二人抱えて家に帰ってき
たってことだろう。

恐るべし異世界人パワー。

上半身を起して伸びをする。

少し腰が痛い…。床だから当然だ。

することがないのでとりあえずこの家を観察する。

木できた壁に、くり抜いただけの窓。

立ち上がって窓から外を眺めると、ここが森の中であることが分かる。

しかも、この部屋はかなり高いところらしく、20メートルくらい
下に地面が見えた。

窓から首を出して周りを見回したが、視界に入るのは木と葉っぱと
なぜか”クルックター”と鳴くニワトリもどきのみで、近くに民家は

見えない。

家の壁が木の皮でおおわれていることから、どうやらこの家は、大きな木をくり抜いてつくった家らしいと分かる。

もしかすると、自然にできた木のウロを家として使っているのかもしれない。

床は木の板を敷き詰めて、平らにしているだけようだ。

それから、部屋には木製のテーブルと二つの椅子。

椅子の片方は子供用に見える。

かわいいピンク系の座布団だから女の子だろう。

それも12、3歳くらいなの…。

加奈は、もしかして大きな子供がいるのだろうか。

20代前半に見えたのだが…。

妹だろうか。

美人姉妹か。

少し響きがエロいな。

そんな妄想を考えると、ベッドの掛け布団が動いたのに気がついた。白いシートから真っ赤な髪がのぞく。ベッドは赤髪少女が占拠していたようだ。

俺が床に転がされていた理由に納得がいく。

当然、女の子がいるのだからベッドはそっち優先だろう。

例え俺が紳士とはいえ、同年代を同じ所で寝かせるのは問題だ。

紳士な視線をベットに向けると、かなり大きなダブルベットであることが分かる。

枕が二つあることから姉妹で寝てるんだろつ。

二人で一つのベットを使っていることから、そんなに広い家ではないと思われる。

赤髪少女の状態が少し気になり、ベットの方へ歩いていくと、後ろから急に声をかけられた。

「起きたのかい？」

隣の部屋にいた加奈が入ってきたようだ。

やましいことはないのに動揺してしまった。

加奈が椅子に座ったので、了承を取ってベットに腰掛ける。

赤髪少女が目を覚ますまで、加奈にこの世界にいる生物についてと、りあえず教えてもらうことになった。

つまり、俺はようやく、猫耳娘（ついでにライオンや熊）が存在するかどうかを確認できるのだ。

猫耳娘を求めるなんてなんと破廉恥な奴だ…と紳士、淑女の皆さまは思われるかもしれない。

しかし、俺はそんな邪で下品な思いを抱いて、猫耳を求めている訳ではないのだ。

もちろん単純に猫耳娘といちゃいちゃ話がしたいという不届きな気持ちがあるのかと聞かれて、Noと答えたら俺は真っ赤なウソつき、もしくは、紳士な仮面を被った変態紳士になってしまうだろう。

しかしそれ以上に至高のサーカスのために彼女達が必要なのは本心だ。

実は、この世界で少しずつサーカスを創ってみたいと思っただけから、どんどんその存在が気になりだしていったのだ。

サーカスなんてピエロだけいけばいいじゃないかと思う人もいるかもしれないが、想像してみてください。

ライオンや熊のいないサーカスは、煮卵の入っていないラーメン並みに味気ないと思わないだろうか。

そして、普通の雑技団見に来て、火の魔法や氷の魔法が飛び交う中、猫のように縦横無尽に飛びはねる猫耳娘の雑技団を見た場合、ラーメン頼んだのに、間違つて、チャーシューメンが出てきた時と同じくらい喜ばしいと皆感動してくれるはずだ。

つまりは、そう言うことなんだ。

今の俺の心は、妄想の異世界サーカスが支配しているのだ。

言語神の加護による妄想の増大のせいかもしれないと一瞬考えたが、俺にはどうでもいいことだった。

例え創られた感情だったとしても、こんなにワクワクした気持ちは初めてだ。俺自身は決して止めるつもりはないし、止める必要も感じないのだ。

結論から言おう。

いるらしい。

加奈の前だから平静を装っているが、かなり嬉しい。

どうやら遂に俺のターンが来たようだ。

しかも、猫耳娘やライオンだけでなく、火や雷を吐くライオンまでいるらしい。

加奈から異世界情報を引き出したところ、以上の有益な情報が得られた。

途中、加奈の口撃に何度も怯みそうになったが、心を奮い立たせてなんとか得られた情報だ。

しかも、ふと加奈の胸を見たときに、『加奈の胸を揉みだきたいな』と俺の口から洩れてしまって、一時、死を覚悟した。何とか謝って許してもらえたが…。

妄想増大と妄想漏洩って、ほんとに勘弁して欲しい。

しかしそれにしても…。

猫耳娘が奇跡ポイントで生み出された存在だったとは…。とんでもない事実を知ってしまった。

実は、加奈が猫娘の誕生秘話を聞かせてくれたのだ。

何でも昔は、いわゆる通常の人と魔獣しかいなかったようだ。猫族も犬族も妖精族も蜘蛛族もいなかったとのこと。

しかし、5000年位前にドーマ帝国（今では、古代ドーマ帝国と呼ばれる）という巨大帝国が世界中を支配していった。

その初代皇帝がとんでもない戦略家で、どうやら一代で大陸制覇を成し遂げた。

その名残で、ドーマ語が公用語になっているとのこと。

俺が言語神からもらったスキルもドーマ語スキルだ。

それが猫耳娘とどう関係しているのかって普通は思うだろう？

俺もそう思った。

だが、どうやら奇跡ポイントとは世界の理にも影響を与える力があるようだ。

つまり一人が願っても奇跡ポイントは少ないし、払える対価も最大でも一人分の命であるため大した奇跡は起こせない。

しかし、多くの人が集まればどうだろうか？

古代ドーマ帝国の初代皇帝はそう考えた。

そして、それが正しいことが証明される。

六割以上の人が同時に願えば世界の理すら変えられる。

六割というのは、例の脳内神様が世界の理を変えたときに六割超えたからと理由を述べたかららしい。

古代ドーマ帝国の一番の功績だ。

ここで、猫耳娘の話に戻ってくる。

つまり、古代ドーマ帝国の初代皇帝は、多くの人が猫耳娘の存在を全人類が同時に願うように御触れを出したのだ。

同志よ！！と一瞬思ったがどうも少し違うらしい。

違う点というのは、別に猫耳娘だけを願ったわけではないという点だ。

実は、古代ドーマ帝国の初代皇帝には、イケメンと美女の二人の幼馴染がいたらしい。

美少女な幼馴染にアピールしたくて、頑張って国を起こして拡大していったらしいんだけど、彼女は全然振り向いてくれなかったようだ。で、”大陸統一したよ”とその幼馴染二人に報告に行ったときに、二人から”結婚します”って、逆報告受けたようだ。

悲しいよな…。

それに怒り狂った皇帝さんが、美男美女であるほど、異形な人外と融合すべきだと民衆を扇動したようだ。

アホだな…。

何やってんだ、皇帝にまでなって。

そう思ったのは俺だけではないはずだ。

ちなみに表向きの理由は、イケメンと美女が他の人に比べて、神様からの優遇されすぎている気がするから、神様が誰に奇跡ポイントを与えるかを顔で決めないように、美男美女は人外と融合するべきだという主張らしい。

完全な妬みだ。

よく世界中の6割もの人が納得したと思う。
しかも一人10ポイントも使ったようだし。
脅したのだろうか？ 集団心理は怖いな。

とりあえずまとめると、

超絶美男・美女は、昆虫系や軟体動物系の魔獣（蜘蛛やスライムなど）と融合しろ。

かなりの美男・美女は、精霊と融合しろ。

そこそこの美男・美女は、獣系の魔獣（猫や犬など）と融合しろ。
という願いだっただようだ。

ちなみに精霊と融合したのが、妖精族^{エルフ}って呼ばれている。

猫耳娘やらエルフやらと皇帝の意図と逆効果になっている存在もいるのではないかと感じるのは、俺が日本男児の感覚を持っているからなのだろうか。

じゃあ、通常人（融合してない人種をそう呼ぶらしい）には美男美女いないのだろうかと思っただが、今では必ずしもそうではないとのこと。5000年も前のことだからな。

美人の子供が美人とは限らないし、フツメンからイケメンが生まれることもある。

ただ、異形種（融合した人種をそう呼ぶらしい）は比較的美男・美女ぞろいらしいが。

加奈も美人だし。

今では、この皇帝、横恋慕皇帝って呼ばれていて、その辺の子供でも知っているみたいだ。

とりあえず、世界中の誰が馬鹿にしようが、俺だけは彼に敬意を表したい。

貴様は天才だ。

そして、猫耳娘をありがとうと。

あっ、そういえば…。

「加奈。この子に何やらせようっ？」

赤髪少女を指さしながら、ふと疑問に思っていたことを口にする。

「ああ、ちょっと街まで行って調べて欲しいことがあってね」

「調べて欲しいこと？」

「そうだよ。ついでにあんたの手も借りたいくらいなんだがね……」

なんだろうか？

なんか美人に頼まれるといやとは言えないよな。

「協力するよ。俺に出来ることなら」

「いいのかい？それにしても、あんたが人の心の機微を理解できるようになっているとは、世紀の大発見だね。礼を言うよ……」

加奈が、一呼吸おいて話を続ける。

「実は、四日前に妹が攫われてね……」。

街にいるはずなんで、どこにいるか確認して欲しいんだよ」

妹が攫われたと……」。

驚きでどう反応したらいいか分からず硬直していると、近くで突然声がした。

「その話、了承するわ！」

どつやら赤髪少女は、今まで寝たふりをしてきたようだ。

第九話：ダークエルフと赤髪少女と一つの取引

「その話、了承するわ！」

静寂が支配する部屋の中に凜とした声が響く。

どうやら赤髪シヨートの少女は、今まで寝たふりをしていたようだ。

ベットに寝ていた少女が鋭利な視線を加奈に向けながら、上半身を起こすと、白い掛け布団がめくられる。

少女の赤い髪によく似合う淡い緑の服が目に入り、彼女がローブを羽織っていないことに気がついた。

少女の真っ赤な髪が風で揺れ、夏ミカンのような香水の香りが鼻に届く。

ヨモギ色の服は肌が透けそうなほど薄く、加奈よりは小ぶりだが、手のフィットしそうなトマトくらいの塊に視線が釘付けになってしまった。

トマトといっても服が緑色なのでまだ熟れる前だが…と不埒な思考をする一方で、ブラジャーはこの世界にないことも確信する。

胸から視線を下に移動させると、手は丈夫そうな黄色い糸で拘束されており、抜けるような白い肌に食い込んでおり、背徳感を醸し出している。

どどん妄想にはまっていた俺は、清廉な少女の声で現実に引き戻される。

「私も手伝ってあげる」

そういえば、加奈の妹の話をしているところだった。

”言語神の加護”のせいで、妄想ばかりになってしまっ
気をつけないといけないようだ。

鋭い視線をした加奈が、赤髪少女に返答する。

「雌豚、そっちの要求は？」

「吸夢草の種よ」

雌豚と呼ばれたにも関わらず全く気にする素振りも見せずに、すぐさまそれに切り返す赤髪少女。

なんか一人おいてけぼりをくらっている気がしてしまう。

そのまま俺を無視して、二人の応酬が続いていく。

「”水の精霊神の加護”かい？」

「ええ、そうよ。手に入る？」

「大丈夫だと思うね」

一時休戦状態に入ったのか、場を静寂が支配する。お互いの視線を外さすにらみ合った美女二人。一方は不気味な笑みを、もう一方は真剣な表情で。

やはり完全に俺は空気のようにだ。

俺の存在をアピールするついでに、意味のわからない言葉について質問することにする。

「吸夢草っていうのは？」

加奈が赤髪少女から視線を外さず答えてくれる。

「水の精霊神の加護”の氷結効果の発動を遅延させるのに必要な植物だよ…。」

放っておくと”水の精霊神の加護”を得てから10年後に体中の水分が凍って氷人間になっちまうからね。

おそらく、胸の貧相なお嬢ちゃんの家族の誰かが、”水の精霊神の加護”持ちになったんだろうね。

貧乳娘の”火の精霊神の加護”の灼熱効果の発動を遅延するために、冷却魔法を取得したくてね」

”火の精霊神の加護”の灼熱効果というと、確か加護を貰ってから、ちょうど10年後に燃え尽きるってやつだったな。

それを防ぐために家族が”水の精霊神の加護”か…。

加奈の推測を赤髪少女が否定しないということは、加奈の推測正し

いのだろう。

赤髪少女は、見かけによらず壮絶な過去持っているようだ。

なぜ彼女は加護持ちになったのだろうか。いつの間にか彼女の過去についての想像が膨らむ。

危うく思考の渦に巻き込まれそうになった時、突然部屋に入ってきた蜂のような虫の羽音でハッとする。

今回は、妄想が漏洩しなくて助かったようだ。

しかし、なぜ自分で採りに行かないのだろうか。

「なぜ加奈に？」

「吸夢草は、闇の精霊族にしか手に入れられない場所にあるからね」
なるほど、それなら納得できる。

「手に入りにくいのか？」

「ああ。トルマニアン帝国の王都近くでしか採れないからね。
しかも、ここトルマニアンに住んでた闇の精霊族は、30年前から
下等なトルマニアン人に迫害されてるからね。」

そのせいで闇の精霊族は散り散りになってしまったし、わざわざ危

険な王都近くまで採りに行こうなんて闇の精霊族はいないしね。
今買つとおそらく1億^{ガルト}Gはかかるだろうね」

新しい事実判明した。

ここでの通貨の単位はガルトのようだ。

1億ガルトがどのくらいかは分からないが、億というからは、それなりに高そうではある。

余り興味がなかったので、聞くのを後回しにしていたのだ。

猫耳と魔法や魔獣に比べたら、重要度が落ちだから仕方がない。

そして、彼女がこんな山奥に住んでた理由も判明した。

どうやら、ここに住んでる奴らが加奈を苛めていたためのようだ。

加奈の口が悪くて人付き合いができないという可能性も高いのだが…。

だが、なぜ他の国に行かないのだろうか？山奥に住むにしてもその方がいいと思ってしまう。

しかし、それにしても…。

「30年前に何が？」

「…黒化病だよ。

トルマニアン帝国で30年前に流行ってね。

肌が黒化するから、闇の精霊族が原因じゃないかって、うわさが流れて…。

高貴な闇の精霊族がそんな病气持つてる訳がないのに、おつむの足

らないトルマニアン人には理解できなかったんだろうね。

実際には、ネズミに噛まれることでネズミから感染することが、10年前に分かったんだけどね。

ただ、今でも下劣で下品なトルマニアン人は、病気の原因は闇の精霊族だって思っているし、そう教えられてる。

特に、その時に闇の精霊族を虐殺しまくった陰湿で陰険で粘着質な光の精霊族はこの国の英雄だし、今では貴族や王族はほとんど奴らの関係者になってるからね…」

さらに空気が重くなってしまったようだ。

無理して話に入るんじゃないかと…と、後悔しながら俺は二人を観察する。

かなり重苦しい空気の中、先に口を開いたのは、加奈だった。

「…ついいかい？」

なんで私のいる所に向かって召喚魔法かけたんだい？

吸夢草が欲しいなら、私が死ねば意味がないじゃないか。

いくらあんたが胸だけじゃなく脳みそも足りなかったとしてもそのくらい理解できるだろう？」

確かにそうだ…。当然、同意するのは胸のことではない。加奈より小さいとは言え、日本人の平均よりは大きいのだ。

俺も疑問に思っていたのは、なぜ殺そうとしたんだろうかという点だ。

加奈の問いかけに赤髪少女は、口を開く。

「占いの女神のお告げよ。

対価を払って、占いしてもらったの。

初めて会った闇の精霊族に向かつて、数奇の女神に対価を払って召喚を行なえば、願いがかなう可能性があるってね」

なるほど、俺がここにいる理由が判明した。

どうやら、すべて占いの女神と数奇の女神さんのせいのようなだ。

もし、会うことがあったら、胸揉んでやろつと思つ。

神様に会えるかどうか分からないが。

少女の返答にどうやら加奈も納得したらしい。一息入れ、緊張感を少し解いた加奈が赤髪少女に語りかける。

「なるほど…。分かったよ。

吸夢草の種の採取は、急ぐのかい？」

「…5年以内なら…」

「そうかい。じゃあ私のチビな妹を助けるのを優先してもらつよ」

「取引成立ね！」

赤髪少女が初めて笑顔になる。彼女の赤髪には、笑顔が一番似合うように、暫く、見とれてしまっていた。

輝く笑顔とは、こういうのを指すのだろう。

かわいいな…。

そう思った瞬間に、ベットに腰掛けていた紳士な俺の右手は、手を拘束されたいたいけな少女の胸に実った緑色のトマトを遠慮なく？ぎ取るうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3276ba/>

異世界召喚された道化師（ピエロ）

2012年1月14日08時45分発行